第５７号　　1997年３月４月合併号

センター通信

編集部：北京日本学研究センター２階２１１室　　責任編集：山口・王津

［今月号の概要：ニュース、教授御紹介！、離任挨拶、編集後記］

ニュース

◎三月六日に研修コースの入学式が、国家教育委員会を始め関係責任者が集まる中盛大に行われた。

◎三月十三日午後二時、中日両国の周作人研究の第一人者、北京日本学研究センター日本側主任教授木山英雄先生と北京大学中文系教授銭理群先生が、センター三階電教室にて平等且つ情熱のこもった対談を三時間近く行った。センター主任厳安生先生が通訳兼コーディネーターをこなした。

◎三月十四日午後七時から十時まで社会研究室周維宏教授主催のもと、センター社会コースの一年生、二年生、三年生が一堂に会して和やかな雰囲気の中で懇親会を行った。三年生の無事卒業を祝い、二年生の赴日後の健闘と健康を祈り、一年生の勉学上の質問に答えるという、いくつもの意味を帯びたこの会は学生の好評を博した。

◎三月二十五日午後四時、北京日本学研究センター十期生の卒業式が行われた。席上、北京外国語大学の新しい学長陳乃芳女史が祝辞を述べた後、日本国際交流基金北京事務所小熊旭所長より励ましの言葉が贈られた。特にクラーク博士の言葉をもじった「青年よ！淑女よ！大志を抱け！」との一句が卒業生の胸を打った。

◎三月二十五日午後六時、９７年春学期派遣専門家の歓迎レセプションが中苑賓館で行われた。席上まもなく離任される木山主任教授が離任のご挨拶を行った。最後に代田主任補佐の三本締めによって、宴会は盛況のうちにお開きになった。

◎四月一日午後二時、北京外国語大学の九四級大学院生の合同卒業式がアラビアセンターで行われた。北京日本学研究センター十期生も修士服を身に纏い、参列した。北京日本学研究センター主任厳安生先生が教師代表として祝辞を述べ、卒業生を激励した後、北京外国語大学学長陳乃芳教授と副学長穆大英教授より、卒業証書と学位証書が授与された。卒業式が閉幕した後、卒業生たちははしゃぎながら記念写真に収まった。

十期生の皆さん、本当にご苦労様！

教授御紹介！

氏名：　須田　淳一　(すだ　じゅんいち)
生年月日：　１９６０年１２月２０日
血液型：　　Ａ　型
出身地：　埼玉県朝霞市
経歴：
獨協高校卒、ｶﾘﾌｫﾙﾆｱ州立大学留学、早稲田大学卒、早稲田大学大学院修了、専門：日本語学（文法史）、日本語教育。主な研究ﾃｰﾏ：助詞「を」の機能変遷、現在：山梨大学 教育学部国文学科 非常勤講師、　兼務校：共立女子大学国際文化学部、大東文化大学文学部、　担当講座：国語学概論、日本の言語文化史など、　研究社『新和英大辞典（改訂新版）』編集委員。　共著：『くわしい国文法』文英堂、『基礎から学ぶ古文単語の錬成』清水書院、『現古辞典』河出書房新社（近刊）。
今年の目標：　『日本語教育のための日本語史』（アルク NAFL 選書）を
　　書き上げること。
趣味・特技：　こちらに来てから篆刻　、特技なし
心がけ：快食・快眠・快便
日中関係へのメッセージ：難しいことは解りませんが、「あなたと私」という関係
　　を大事にしたいと思います。
学生諸君に：　古代日本語の言語構造は、みなさんにとっても決して簡単なものではないと思いますが、現代日本語に密接に関わっています。この講座でみなさんのお仕事の現場やご研究に、少しでも役立てたらと願っています。もし古代日本語に興味を持っていただけたなら、嬉しいかぎりです。古代日本語は日中韓の共有財産とも思えます。ご研鑽を祈ります。

氏名：　清水　昭俊
生年月日：　１９４２（昭和１７）年８月２２日生まれ
血液型：　　Ａ型
出身地：　答えるのが難しい質問。最も正しい答えは「出身地なし」でしょう。生まれは中国上海市で、生後間もなく日本に引き揚げる。両親の古里は福井県。幼少時は福井、東京、小樽、新潟で過ごし、その中では東京が一番長い。だからといって、東京が私の「古里」である訳ではありません。
経歴：
　　東京大学教養学部卒（１９６５年）
　　東京大学大学院社会学研究科博士課程学科課程修了（１９７４年）
　　千葉大学工学部助手(１９７４－７８年)
　　広島大学総合科学部助教授（１９７８－９１年）
　　国立民族学博物館助教授、教授（１９９１－現在）
　　総合研究大学院大学文化科学研究科（併任、１９９１－現在）
今年の目標：
　目標を立てても、すぐ年末が来てしまうので、なかなか目標が立てられない。ここ数年書きためてきた原稿を本にしたい。
趣味・特技：

いま中国にいるせいか（今回が事実上初めての中国生活です）、これまでも海外調査などで未知の土地に入った時に経験した、少しひやっとした孤独感が懐かしく思い出されます。旅行する時の緊張感が好きです。特技はなし。
普段心がけていること：　よく忘れ物をするので、忘れ物をしないこと。

日中関係へのメッセージ：

戦後の５０年余の日中関係は、それ以前の５０年余の日本による帝国主義的な侵略の歴史を修復し、友好的な関係を再建すること（それはいまだに不十分ですが）に費やされたと思う。今後は、中国が改革開放政策によって経済発展を遂げるにつれ、丁度日米関係の戦後史が、政治的な友好関係の反面で貿易関係では紛糾の連続だったように、経済的な摩擦は避けられないと予想されます。日中の間には支配と戦争の長い歴史の記憶があるだけに、純粋に経済的な摩擦でもこじれて政治的な対立に転化し、その解決に双方が苦労するというような場面が増えていくのではないかと危惧されます。日米関係の歴史を見て大事なことは、経済的な摩擦が深刻だった時にも、日米それぞれの国内に複数の意見があり、その意見の対立を伝えるニュース報道があって、日本もアメリカもナショナリズム一色に塗りつぶされることはなかったという事実です。経済問題は政治問題に拡大することなく解決されました。

国家間の摩擦を友好的に解決して行くには、政治家、経済人、一般国民それぞれに一定の見識が必要であり、それぞれが必要な役割を果たしていく必要があります。学問研究に携わる者としては、国際的な交流が盛んになり、友好的関係のみならず、対立の状況も多発するような時代であればあるほど、諸外国についての適切な知識と情報を収集し、社会に提供することが必要であり、研究者の役割は大きいと考えます。その意味で、私の専門である文化人類学（民族学）もその一翼を担っていますが、日本には世界各地に関する（直接利害関係のある地域のみならず、利害関係が目立たないような地域も含めて）地域研究が曲がりなりにも形成され、拡充されつつあるという事実は、留意すべきでしょう。

中国には民族学研究の伝統と豊富な蓄積があります。しかし残念なことに、中国民族学の視野はこれまでほとんど国境を越えることがなかった。変化が始まったのはつい最近のことで、日本に留学して人類学を学んだ中国人人類学者が、日本の社会と文化を研究し始めています。欧米で学ぶ留学生も、それぞれの留学先で中国以外の社会を研究していることでしょう。しかし、中国本国の民族学は現在でもなお中国の少数民族研究です。

地域研究については私に知識がないので、今回の滞在中に、中国の関係者から地域研究の状況を伺ってみたいと思っています。ただし、確かなことは、中国には日本研究があり、北京日本学研究センターはその一翼を担っている。中国にとって、諸外国の中でも日本との関係が重要であればあるほど（日本は中国の第一の貿易相手国になったと記憶しています）、政治・経済の分野のみならず、その他の分野でも、日本に関する適切な知識が求められるでしょう。同じことは日本以外についてもいえます。中国の学界には、世界各地――日本やアメリカ、ヨーロッパのみならず、（日本以外の）アジアやアフリカ、太平洋、中南米も含めた――を対象とした地域研究の振興を期待したい。

学生に一言：　大学院修士課程の最初の１年半のデスクワーク（教室での授業と演習、図書文献による学習）も大事ですが、二年次に日本に滞在する半年間は、大変に貴重な経験となるでしょう。主な目的は修士論文のための調査研究ですが、この目的に直接関係のない事柄であっても、生活の中で得る経験は、それまで文献だけで得てきた日本の知識とは異質のインパクトを与えてくれるはずです。すぐには言葉にできない事柄も含めて、しっかりと体で受け止めてきて下さい。

氏名：　辻本　雅史

生年月日：１９４９年１０月２８日

中華人民共和国建国と同年同月です。

血液型：　A型

出身地：　愛媛県の瀬戸内海の島で生まれ、育ちました。みかん畑に包まれた島です。

経歴：　京都大学文学部史学科(日本史)卒、同大学院教育学研究科博士課程修了。光華女子大学（京都市）、甲南女子大学(神戸市)教授を経て、現在京都大学教育学部助教授。

今年の目標:２年前の「宿題」(単行書の脱稿)を果たすこと。

趣味:将棋、水泳(いずれも特技ではない。好きだというだけの意味です。どなたか将棋の相手をして下さる方はいませんか。)

普段心がけていること:特にありませんが、ただ、食べ過ぎないで、かつ適度に運動をすることを心がけてはいますが･･･。はや成人病の症状が出ているのです。

日中関係へのメッセージ:親しい友人を持ち、お互いの具体的な顔を思い浮かべながら、相手の国のことを考えたいですね。また、相互の歴史を知ることが大切だと思います。

学生に一言:他者(日本)を学ぶことは、自己を発見することでもあることを忘れないで下さい。

氏名:　野坂　幸弘

生年月日：１９３７年9月9日

血液型：B型

出身地：北海道小樽市

経歴：北大大学院、文学部助手、苫小牧駒沢女子短大講師を経て

１９７０年、岩手大学講師、１９７９年教授、現在にいたる。

今年度の目標：秋から、パソコンを使用できるようになること。

趣味：音楽(６０－７０年代のＪＡＺＺ)を聴くこと。映画、最近は中国語系のものも、わりと観ています。この数年間で、印象に残った作品として「Ｍｒ．バタフライ」（友誼賓館が出てくるという意味で）を挙げておきます。

普段心がけていること:飲みすぎ、食べ過ぎないこと。

特技：何もしないことが苦痛ではないこと。

日中関係へのメッセージ:相互理解を深める、ということでしょうが、とても難しい課題だと思っています。

学生に一言：近現代文学に関して言えば、中国では知られていない(そして日本でも、特にさわがれないような）作品の中から、自分の好みの作家や作品を見つけ出してほしいと思います。センターの図書館の範囲からでも、幾つか探すことができるでしょう。

氏名：木村　正中

生年月日：１９２６年４月１日

血液型：ＡＢ型

出身地：東京

経歴：立教高等学校教諭、明治大学教授を経て、学習院大学教授。一九九六年定年退職。

今年度の目標：これまでの研究を反芻しながらまとめる。

趣味・特技：音楽鑑賞

普段心がけていること：静思(特に定年退職後)

日中関係へのメッセージ：中国は日本の先輩であり、また逆に日本は中国の先輩でもある。歴史の正しい認識の上に、互いに文化の先達となり、またそれぞれの文化のよき理解者でありたい。

学生に一言：「唐土（中国）」とこの国(日本)とは、言異なる(言葉が違う)ものなれど、月の影(光)は同じことなるべければ（同じハズデアルカラ）、人の心も同じことにやあらむ（同じデアロウ）。（土佐日記）

挨拶四件

木山英雄

センターの歴代の主任は、ひごろ僕もその勤勉有能ぶりをよく知っている方たちで、実際のところ、いろいろな制度・規定や慣例が固まるまでのご苦労はたいへんなものだったにちがいありません。そして僕の前任の竹内さんの代になると、内部の実務はたいてい補佐に任せて、外部での活躍を主とされるようになったと聞きました。その次にやって来た自分の一年を省みると、すこぶる勤勉有能な代田補佐殿のお陰で対内的に前任の作風をしっかり受け継ぐいっぽう、竹内さんのように中国語がお上手でも、また人前で喋るのが得意でもないため対外的には前任の作風をあまり受け継がず、その結果、歴代いちばんの怠け者主任に終わった観があります。中国には、こういう場合の言い訳に好都合な「臥治」とかいう結構な理想があるけれど、まさかそんな洒落たことを気取るわけにもいきません。実情も、主任というのはやはり、時には嫌でも挨拶のような話をしなければならないし、一年も北京に居れば、時間の無いことを口実に講演の類を断ることも難しいし、お喋りの罪を一度も犯さずに済むほど理想的には終始しませんでした。それどころか、喋るからには少しは内容のあることを、と思う余りに、宴会の席で突然くそまじめな演説を始めて、通訳係の呉懐中君を慌てさせたこともありましたっけ。離任を目前にしてセンター通信に寄稿を求められ、あれこれの口舌の跡から職務を意識した話を幾つか、記憶や中文草稿の残りから選んで責めを塞ぐことにしたのは、ふだんの僕に比べればずいぶんお喋りだった期間の記念というか懺悔というか、とにかくセンターに関する考えの一例として留めおくまで。重複などは切り捨て、なにかの証拠に、カレンダーの書き込みを根拠に日付と場所も添えて。

その一、新派遣教員・新入学生歓迎会で（九月十九日、市内某菜館）

思うに外国文化の研究は、別の世界に深く触れる楽しみと、自身の文化の中で周囲とは異なるものの見方や感覚を知ることから来る一種の孤独を、または孤立の苦しみさえも、伴いがちな仕事です。特に国と国の関係が緊張した場合には、その苦しみは悲劇的な程度にまで増大するかも知れません。事実、前の戦争の時、いずれの国においても、他方の文化に親しむ度合いの深い人ほど辛い経験をした例は、幾らでも数えられます。この点に関しては、個々の研究者が各自の条件のもとで、自ら正しいと考える道を進むほかないのでしょう。このセンターに関与している私たちも、そういう場合に理由もなく日本国の肩を持ってくれる中国人の増えることを期待するわけでありません。一つの国家が自国の文化に対する理解を世界に求めて、物心両面にわたる努力を費やすことに広い意味の政策的な考慮が働いていないはずはありません。しかし、学問のうえで直接その仕事に当たる人間は、異なる文化の間の相互の発見や啓発の可能性にこそ意義を見出し、それを通じて世界を動かす力が政治や経済の利己的な論理から少しでも人間同士の共感や共生の論理に近づくことを理想としているのだと、そう私は考えます。それがなかったら、本当に人間の世界は駄目になってしまうだろうほどに、現代の危機は深いのだ、とも。このような理想の上に生まれる尊敬と友情がこのセンターの誇るべき財産になることを願うものです。

その二、『学人』五周年記念座談会で（十月十二日、北京大学聖文化研究所）

今回は北京日本学研究センターという機関の関係で北京に来ているので、その立場から一言。日本学という学問が日本にあるわけではありません。それはもと、Ｊａｐａｎｏｌｏｇｙの訳語であって、西洋人による日本文化の研究を意味していたことは、漢代の学問、ひいてはのちの宋学に対し漢代風の学問流儀を意味した漢学という中国語にＳｉｎｏｌｏｇｙの訳語が重なったのと似た事情によります。私にとっての中国や中国文学はまさにそうした外国研究の対象に他ならないので、本国の哲学や文学を研究なさっている皆さんに対するのとはまた違った意味での同業の誼みを以て私はセンターの人たちと接しているわけです。センターでは、当初の日本語教師再教育過程に日本学の大学院修士過程を加え、その方に重点を移してすでに十年、中国の学術機関としての名実そなわった自立を目指して、その実際的な段取りを構想する任務が生じてきました。それでいろいろ考えるのですが、決して少なくはない困難の一つに、センターの人材が今までのところ外国語系学科の出身者にほぼ限られていることに由来する問題があります。中国の大学の外国語教育の特徴は徹底した実用主義にあり、それは日本の近頃とみに風当たりが強いいわば教養主義とは互いに一長一短といえるし、背景には歴史と国情の相違もあることですが、いずれにしてもセンターの日本研究者と、たとえば皆さんのような本国文化の専門家との間には相当厚い壁があるのを感じます。この点につき皆さんの関心と理解を求めるに当たって、自分の経験をもとに申しますと、私どもの中国研究が

中国で漢学と呼ばれ、あたかもそれの本山であるかのような意識から好意や評価を受ける場合があって、そんな時はちょっと有難迷惑といいますか、複雑な気持ちになり、自分はなにも中国のために中国文化を学んでるわけじゃないんだが、と呟いたりします。同じ錯覚が、センターで学生たちの研究を短期間で日本国内の水準に「引き上げる」べく懸命に指導している同僚たちの意識にも生じないとは断言できませんが、とにかく異文化の研究に関する意識が当事者はもとより周囲にも希薄な状態でセンターとその日本学の自立を考えることは困難です。私などは、今ある自己の基準で勝手に裁断することを許さぬ対象だからこそ研究に値するという点で、外国文化も自国の古典もあまり変わりが無いくらいに思っていて、「内なる伝統」というものにしても、研究の前提よりは結果であることを望みますが、では異文化を異文化たらしめ、古典を古典たらしめる前提はなにかといえば、日本の儒学史に時・処・位という考えがあって、これを私は借用することにしています。中国儒学では時と位のことは言うけれども処の観念は無かったようですが、それもそのはず、孔子と儒教は中華の世界においては処の別などには関わりのない普遍的真理でした。しかし日本の儒者にとっては、大陸の先進文明に素朴に同一化する形で孔子を崇拝した段階を過ぎ、異国の権威をそのまま自身の権威とすることに不安や疑いが生じてくれば、真理の歴史性（時）や関係性（位）のほかに「水土の変」すなわち風土・地域性（処）の観念を付け加えることにより、特定の教条や事跡そのままでない聖人の「心」の普遍性と自己固有の条件の絶対性との両立をはかる考えが出てくるのは必然だったでしょう。現代の世界に普遍的な権威がありうるかどうかは知りませんが、それぞれの時・処・位を負った学人がせめて共通の理想のもとに、文化の論理を磨き合うことの意義は決して小さなものでないでしょう。中国の若い俊秀たちが「学術史研究」という反省的な問題意識の上に発刊した『学人』には、諸文化に向かって視野を開いた本土文化研究の推進を特に期待しうる理由があるだろうと、思っています。

その三、日本学シンポジューム「言語研究とコンピュータ」閉会式で（十月五日、北京日本学センター）

私はワープロを只のタイプライターとして使うだけの能しかありませんけれども、北京へ赴任するのにあまり大きいのは持っていきたくないなと思いながら、電気屋を覗いてまわった結果、パソコンの方にかえって小型の物があるという意外な事実を知りました。その軽便さにまず感動し、ついでにパソコンなるものをいじってみるのも一興かという気になって、その方面にくわしい若い同僚に相談したら、はっきりとは答えないが、どうも私の年齢と水準でパソコンを持つのは無意味だといいたいらしいんですね、相手は。それでがっかりして、結局大きなやつを抱えてきたんですが、とにかくそんなふうで、コンピュータというものには、わからなくて悔しいからいっそ無視してやりたいような、そのくせなんだか気になるような、煮え切らない関心があるのです。しかしどっちにしたところで、本格的に使いこなすことなど思いも寄らないので、電脳時代から

の脱落は必至と決めていますが、最近も日本ペンクラブにパソコン、とくにインターネットという新しいコミュニケーション方式の発展への対応を考える部会が設けられたとか、新聞が報じていたように、実際ずいぶん目新しい事態が進んでいるらしい。しかしそうかと思うと、コンピュータの言語研究への応用について、今回の報告や実演から考えるかぎりでは、人間の子供が一瞬のうちに認知してしまう程度のことを、計算や記憶の力は恐ろしく発達しているが根本的に頭の固い、文字通り石（トランジスタ）頭の大秀才に仕込むことに四苦八苦している段階のようでもあり、そうなるとまた変に安心して、こっちだって伊達に何十年も言葉と戯れてきたわけじゃないや、どうせ脱落して葬りさられるのなら、こんな程度のでないもっと凄いやつにやられるんできゃ「死也不能瞑目」ってもんだ、などと啖呵をきってみたくもなったりします。以上のような次第で、せいぜい手ごわい敵に脱落させられるために、センターの電脳設備の増強にも尽力したいと思うのであります。

その四、北京中日交流史研究会「中国人日本留学百年記念シンポジューム」で（十二月十二日、社会科学院）

私は中国人の日本留学史を特に研究したことがありませんし、国外にいて関連のある資料も持たないので、今日その関係でお招き頂いた日本学センターの事業の角度から、空言めいたことを少し述べさせていただきます。百年の留学史に因んで私がいささか不釣り合いに感じるのは、現在までのところ、日本文化研究という学問が中国の学問系統全体の中になお安定した地位を占めていないように見えることです。その最大の原因はやはり過去の戦争にあるのでしょうか。かつての侵略敵国の文化を研究するのは、民間の感情においても、研究者本人の意識においても依然として抵抗のあることかもしれません。そんな空気のなかでは日本に独自の文化などあるものかというような古い偏見も簡単には破れないでしょう。これが本当の原因ならば、私は言葉がありません。しかし、いっぽうでは、日本以外の異文化研究に関してもさほど大きな状況の違いがないようにも思えるので、もしそうだとすれば、問題はやはり百年の留学史と関係があることになりそうです。私の印象では、中国のもっとも一般的な留学理念は、「拿来（取ってくる）主義」の一語に代表されるようです。これは百年の歴史と深く絡み合って、十分な理由のあったことだと私も思います。そうして、日本にもまだ取っていくに値いするものがあるなら、どうぞ遠慮なく取ってください、私たちもお陰で古代いらい実に多くのものを大陸から取ってきたお返しができて嬉しいです、と申したい気持ちです。とはいえ、魯迅がこの主義を唱えた真意は、閉鎖的な自大意識に対して積極的に海外に学ぶことの効用を主張することにあり、その人自身はかつて世界の思潮に精神を震撼させられた経験の延長上でそれを言ったのでした。もしも、社会生活そのものがむしろ意識に先んじて世界的同時化の波に洗われだした今日になっても、文化の全体を省みずに文字通りの実用主義的な「拿来」だけが強調されるのだとしたら、それは消極的にすぎるよう

に思います。（私はこれを日本学を看板にする機関の人間として言うだけではない。私の言う日本学も、どこの異文化研究と置き換えられたっていっこうに構わない。世界的同時化との正面切った緊張の下でこそ、中国文化の固有性も、西洋式大厦のてっぺんの可愛らしい屋根瓦みたいなものより遙かに重みのある現実として意識されるはず・・というのは、後からの追加）

もう一つ、文化の仕事の専業化ということがあります。この百年の前半では、文化界の第一級の人物の大半が海外留学経験をもち、その中で日本留学生の比率もなかなか大きくありました。それで、留学生が日本から帰るとしばしば反日に変わるのは何故か、という周知の問題はあったにしても、最悪の国家関係を経た後でもなお文化上の相互理解の最小限度の火種は残ることになったのでした。しかし今後そのような役割は、日本学の専門家に大きく懸かっていくことになるでしょう。その意味からしても、中国の学問としての日本学の将来には深い関心をもたずにいられません。安定した日本学さらには異文化学が成立しないと、現に海外にあって真剣に文化研究に従事している留学生は、帰ろうと思っても本領を発揮できる場所が見つからないことになるわけですね。

以上のお節介じみた空言は、しかし中国文化の勉強に人生の三分の二余りを費やした者の言葉としてお聞きくだされば幸いです。

されど一年--離任に際して

代田　智明

北京の冬は思ったほど寒くはなくて，身構えた身にとって，些か物足りなく感じたけれども，春節（旧正月）には何軒かの中国人のお宅に招待され，心づくしのおもてなしを戴き，暖かい思いに満たされた。中国人の知り合いに言わせると，日本人はどうも人付き合いが冷たいのだそうだ。確かに，旧暦元旦に私を招待してくれた「知人」は，彼の日本留学時代，私の同僚がかつて指導教官であったという繋がりだけであって，実はその当日初めて面識を得たのであった。台湾で，２日間私たちを無償でガイドしてくれた日本語の達者な六十ほどの男性は，私たちの知り合いの友人の父親であった。こういう「友達の輪」というのを律義に遵守する習慣は，私たち日本人には珍しい。日本人の身内の繋がりは，どこかで他人と切れていて，社会にまで開かれていないから，家庭によそ者を迎えることは厄介なことになってしまうのだ。「家族水入らず」が日本の原則であり，そこに無遠慮に踏み込むのは，お節介か我が儘だと思われてしまう。

私のセンター補佐としての任期は一年。長いと言えば，私の人生で海外生活のうち一番長い部類に入るが，短いと言えば，センターは設立以来十数年になり，これからも引き続き大事な役目を果たして行かなければならない。一年は長いようで短い。--年限りということで，一種季節労働的感覚から，仕事を処理したり，やっつけたりしたこともあった。むろん，後顧の憂いがないと言う意味で思い切った決断もできるが，下手をすれば，後は野となれ山となれになりかねない。前任者からバトンを受け継ぎ，後任にバトンを渡すという，人類の世代間リレーの如き平衡感覚も必要になる。短期の繋ぎ役というやや無責任な位置付けと，一年間係わって

来た時間の積み重ねが生み出す愛着と，それが葛藤すると言ったら，やや大袈裟ではあるけれど，そんな絡み合った気持ちの一年であった。たかが一年，されど一年なのである。

中国人の「友達の輪」も一様なのではない。そこには強い濃淡の意識ががあって，それは互いのどちらかが危機に瀕したとき，重要な働きを現す仲間と，ただの知り合いとに区分されるだろう。前者こそが中国人にとって忘れられない親友というものである。日本人にも，気の合う奴とか，親密な友人とかがあり，相互扶助の機能はありはするけれど，危機管理にかんしては，あまり役立たないのではないか。中国人の「親友」は，場合によっては全財産や生命をも顧みない，といった気概が込められているように思う。

私にとってセンターは何なんだろうと，ふと考えてみる。業務を終えてしまえば，縁のない他人なのだろうか。中国の友人たちの些かお節介な優しさに，未だにちょっとばかり閉口している私ではあるけれども，センターにとっての私は身内なのであろうし，私にとってもセンターは身内なのである。ここは，お節介も辞さず，今後もお付き合いをお願いすることにしよう。毎学期入れ替わる派遣教官の方々にとっても，慌ただしい滞在だとは思うけれども，せいぜいセンターを可愛がって，仲間や身内と思って末長くお付き合いを願いたい。中国との付き合い方の秘訣は，神経質にならぬこと。おおらかに，こせこせせず長い目でセンターの行く末を見守りたいものである。

＊＊

意味深い一つの中日の対話——木山英雄、銭理群両先生の対談について

＊＊

雋雪艷文・代田智明訳

3月13日の午後，北京日本学センター文学コース主催によって，「周作人を語る」というユニークなスタイルの，熱気溢れる研究会が行われた。ユニークというのは，研究会がそもそも「対談」という討論のスタイルを採ったことである。お二人の主な発言者－センター日本側主任教授木山英雄先生と北京大学教授銭理群先生は，満場聴衆の面前で対話を進めることにより，中国近代文学両碩学の学術的観点と思想方法を，同じ時間と空間の中で，参加者に直接伝え，目の当たりにさせたのである。センター主任の厳安生教授が自らこの対談の通訳役を担った。

数十年来，魯迅の実弟周作人は一貫して悲痛な歴史の埃のなかに埋もれて来た。中国の学会でもこの数年，周作人文学に関する研究は急速に進んだとは言え，それにしたがって幾つかの重大な見解の相違も生じている。「文学とは人間学」という観念が根強い中国においては，周作人文学に関する研究と評論の歩みも困難に付き纏われないわけにはいかない。今回の研究会が周作人をテーマとするに際して，冷静，客観的な学術的態度で彼の文学創作活動を分析したことは，疑いもなく，勇気ある挑戦であったと言えよう。討論の過程で，対話者はしばしば鋭い問題提起に直面したが，つねに和やかな調子で，態度は率直で，真摯であった。このユニークな討論形式とナイーブな問題のために，聴衆は一貫して真剣で熱っぽい状態に置かれることになった。

お二人の発言者が提示された主な観点は以下の通りである。

銭理群　：*1*　周作人が日本文化を研究する時に採った，対象に対する平等で友人のような態度には，中国人によく見られる「中華意識」が見られない。

2　周作人文学の作品の神髄は，「ほろ苦さ」と「薄甘さ」が同時に存在している点にある。彼のいわゆる「東洋人の悲哀」には「悲しみ」だけではなく

薄淡い「喜び」が中に含まれている。この点に，彼は中国文学と日本文学との結び目を見つけたのだ。

3　周作人はかつて情熱的にギリシャ文学を研究したが，同時に日本文化の中にある民俗の範疇に入る事物に格別の興味を持っていた。その事から，人間性の最も自然で，素朴で，かつ本質的なものに対する，周作人の強い関心が伺われる。彼が日本語を学び，日本文化を理解する重要な方法の一つは，一般の人々の生活の中に入って，直接肌で日本の風俗や民衆の感情を感じ取ることであった。

木山英雄：1　周作人の日本文化に対する関心は，アジアで一足先に近代の実験を演じていた同時代の文学への批評的な共感と並んで，本国の正統詩文の硬直した形式主義や民衆の文芸の荒誕さによって充たされぬ情緒の渇きに発するところもあり，これが柳田民族学への早期からの注目や，彼の日本文学論の独特な視角にもつながっていた。

2　五四新文学を固有文学史の一局面に位置付けし直した文学史論（『中国新文学の源流』）は「載道」（政治，道徳に仕える）と「言志」（個人の即興）の二種の態度の反復を説くが，初案では「言志」が「退廃」になっていたらしい。彼が特に親しんだ永井荷風や谷崎潤一郎も，東洋文人的趣味のみならず，近代のデカダンスを文学の源泉にした人達だ。両人のような「頽廃」派の方が「総力戦」に呑み込まれる度合いが少なかった歴史的事情を日中間で考え合わせることは，戦争の性格上容易でないが。

3　周作人はいわば引用芸術の名手で，彼の読書生活の中に完全に消化された日本文化の総量は驚くに足る。

短い時間の中，触れられた話題は極めて限られたものであったが，より広い意味から既述の対話を理解しようとすれば，その中から，数々の意義を味わい定め，様々な新たな啓発を受け取ることができよう。たとえば，周作人が日本文化を研究するとき採った態度については，個別周作人研究に止まらない思索を人々にもたらすだろう。お二人の発言者が時間の関係から，周作人の民族的節操という些か厄介な問題は，しばらく触れないことを事前に打ち合わせていたとのことだが，戦争と知識人，政治と知識人という今世紀の重大テーマに関して，本当はこの問題を避けて通ることはできないという点で意見は一致しているとの表明もあった。一人の聴衆として，この点に好感を持つのは，それが，お二人の発言者の研究者としての誠実さをはっきり証明したからである。周作人を研究することが，ナイーブで厄介な課題であるがゆえに，ますます急所に，研究者の側の思想構造の本質的な部分に触れない訳には行かなくなるのである。

&&&&&&&&

原稿募集

&&&&&&&&

既に恒例になりました北京日本学研究センター中日日本学シンポジウムが、今年八回目を迎え、錦秋の１０月１６日から１０月１８日まで開かれることになっています。つきましては通信の読者の皆様から原稿を募集いたします。

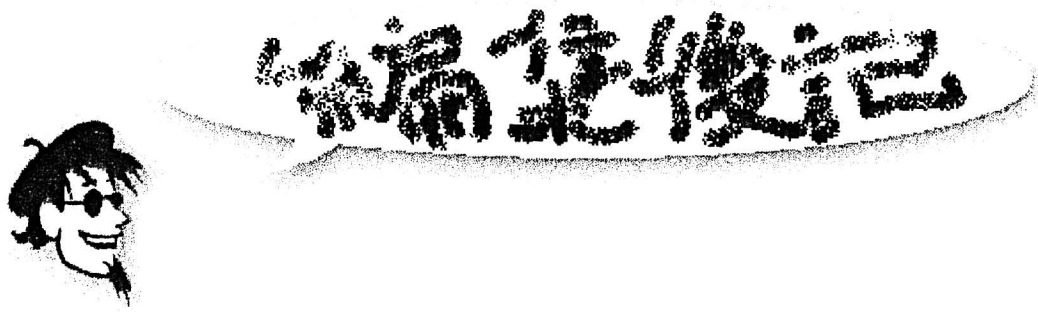
応募規定は下記の通りです。

テーマ：日本文学研究における比較文学的課題

文字数：１５００字程度（論文のあらまし）
使用言語：日本語
締め切り日：5月２０日

採用された方にはセンターより招請書を発行し、会議の参加者としてお招き致します。なお、正式参加者の会議期間中における往復の汽車賃（二等寝台車つまり硬臥）及び宿泊費はセンターが負担します。

連絡係：焉雪艶
電話番号：68422277～580
E-mail: bjryzx@public3.bta.net.cn



春を告げる迎春花に続いて、梅や木蓮も次々と咲き始め、センターもいよいよ新学期を迎えました。

今号は、新任の先生方の自己紹介文と、一年の任期を終えて四月はじめに帰国される木山主任教授と代田主任教授補佐の離任のご挨拶を掲載します。

温厚なお人柄で、独特の語り口が印象的だった木山先生、そして、その木山先生を絶妙に補佐した代田先生、大変お疲れ様でした。無事のご帰国をお祈りいたします。

また、今号からは、呉懐中さんに替わって王津さんが編集スタッフに加わることになりました。自己紹介文の新しいパターンを提案するなど、意欲満々の王さんに活躍を期待したいと思います。（山口）

初めまして。私はセンターの十期生で、今年からセンター通信の編集委員になりました王津です。センター通信はセンターの活動を内外に紹介するものとして知られていますが、これからみなさまのご協力をも頂きたいと思います。ご意見・ご要望をどしどしお寄せ下さい。

また今号の作成上、ソフトのインストールから使用の仕方まで、清水昭俊先生より詳しくご指導いただいたことをここに特記し、感謝を申し上げたいと思います。（王津）